

■大井記念（SI）アラカルト（過去全 63 回の分析）

- ※第 1 回（昭和 31 年）から第 17 回（昭和 47 年）までは大井ダ 2,400m で実施
- ※第 18 回（昭和 48 年）から第 22 回（昭和 52 年）までは大井ダ 2,600m で実施
- ※第 23 回（昭和 53 年）から第 39 回（平成 6 年）までは大井ダ 2,500m で実施
- ※第 40 回（平成 7 年）から第 58 回（平成 25 年）までは大井ダ 2,600m で実施
- ※第 1 回（昭和 31 年）から第 47 回（平成 14 年）まではハンデキャップ競走として実施
- ※第 52 回（平成 19 年）から第 62 回（平成 29 年）までは SII として実施
- ※記録は平成 31 年 4 月 24 日時点

■ 1 番人気馬の 3 着内率はおよそ 6 割

単勝 1 番人気馬は 23 勝、2 着 7 回、3 着 9 回で、3 着内率が 61.9%、単勝 2 番人気馬は 14 勝、2 着 9 回、3 着 6 回で、3 着内率が 46.0%、単勝 3 番人気馬は 7 勝、2 着 12 回、3 着 10 回で、3 着内率が 46.0%となっている。それぞれ決して悪くはない数字だが、上位人気馬の活躍が特に目立つとまでは言えないレースだ。

■ 3 番人気以内の馬が勝つ確率は約 7 割

過去 63 回のうち 44 回は、単勝 3 番人気以内の馬が勝利を収めている。また、単勝 3 番人気以内の馬によるワンツーフイニッシュ決着は 20 回、単勝 3 番人気以内の馬によるワンツースリーフィニッシュ決着は 7 回ある。

■ “連覇”を果たした馬は 2 頭

複数回の優勝例がある馬は、第 30 回（昭和 60 年）と第 31 回（昭和 61 年）の優勝馬テツノカチドキ、第 37 回（平成 4 年）と第 38 回（平成 5 年）の優勝馬ハシルショウグンだけであり、いずれも 2 年連続の優勝だ。

■ 8 割近くの回で 5 歳以下の馬が勝利

馬齢別の勝利数を見ると、4 歳が 20 勝、5 歳が 29 勝、6 歳が 10 勝、7 歳が 2 勝、8 歳が 1 勝、9 歳が 1 勝となっている。5 歳以下の若い馬が優勢と言えるだろう。

■牝馬、外国産馬とも2勝ずつ

牝馬の優勝例は、第41回（平成8年）のパールライト、第48回（平成15年）のネームヴアリュート、これまでに2例ある。なお、外国産馬の優勝例も、第46回（平成13年）のドロールアラビアン、第51回のエイシンチャンプ（平成18年）と、これまでのところ2例だけだ。

■騎手別の歴代最多勝記録は「9」

騎手別の勝利数を見ると、9勝の的場文男騎手が単独トップ。高橋三郎騎手が8勝で単独2位、佐々木竹見騎手が5勝で単独3位、石崎隆之騎手が4勝で単独4位となっている。

■調教師別の歴代最多勝記録は「3」

調教師別の勝利数を見ると、赤間清松調教師、岡部盛雄調教師、川島正行調教師、栗田金吾調教師が各3勝でトップタイとなっている。

■4枠の勝利数が飛び抜けて多い

枠番別勝利数を見ると、4枠（15勝）が単独トップ。2枠（9勝）が単独2位、8枠（8勝）が単独3位となっている。また、馬番別勝利数を見ると、4番（10勝）が単独トップ。3番（9勝）が単独2位、8番（7勝）が単独3位、7番（6勝）が単独4位だ。なお、未勝利の馬番は15番のみとなっている。

<伊吹雅也>